



2012
秀作

第10回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

自分らしく

新潟県・新潟県立長岡高等学校 3年 鈴木 里奈

「高齢でも若くても、健常でも障害があっても、できる限り自立して生きたい。」¹⁾これは福祉が充実する国、スウェーデンの福祉制度のベースとなっている理念である。私はこの言葉を目にした時、これからの日本の福祉のあり方を考えた。そして、ある考えが浮かんだ。これからの日本経済で重要となるのは、『福祉』ではないか、と。

私の弟は、重度の知的障害・自閉症など多くの障害を持っている。現在は高校1年生。総合支援学校で、将来社会に出て働き、生活ができるように毎日作業実習をしている。弟は、知能に遅れはあるが感性は私たちと同じように育ち、将来は社会の一員として働きたいという強い意志を持っている。私たち家族もそんな弟の夢を応援したい。しかし、現実はそう甘くはないようだ。障害者の雇用は、まだまだ少ない。障害者の雇用は障害者雇用促進法で定められているが、まだまだ目標値に達していないところも多くある。障害がある人を雇わなくてはならないが、やはり障害がない人を雇いたいと思ってしまう雇用者側の気持ちも分からなくない。また、弟のように障害が重い場合は作業所で働くことが多い。しかし、その作業所も数が足りていない。働く能力があるのに働けない障害者がいるのが現状だ。このままでは、弟の働きたいという夢は叶^{かな}わないかもしれないと考えてしまう。何か新たな仕事の間があればと、私は考える。

また、以前このようなことがあった。私の祖母は認知症であり、現在グループホームで生活している。そのグループホームを探している時である。母は市内のグループホームをインターネットで20件以上出し、祖母を入れてもらえないか順番に電話をかけていった。しかし、何年待ちだ、今は空いている部屋はないと断られたり、入所金は何百万、その後月何十万かかると言われた。金額、部屋の広さの条件に合うグループホームはなかなか見つからず、15件以上を諦めざるを





得なかった。そして、残るはあと数件となった。母は「もしどこも入れなかったら、この家で介護しよう。」と言ってきた。何度も家族会議を開いた。祖母のことを考えると、グループホームの方が設備が充実していて良い。弟の世話もあり介護はなかなか難しい。家族の負担は増える。しかし、もしどのグループホームも入れないなら、自宅で介護しようということになった。そして、候補の最後から2件目に電話した先で、いくつか部屋があるので入所できるということになった。実際は、他にも入所希望者はいたが、弟が障害を持っていて介護が難しいと説明したら、優先的に入所させてくれたのである。私はほっとした反面、この高齢化社会の中で高齢者介護施設は不足しており、自分たちのように困っている家族が他に多くいるのではないかと考えた。祖母のことを通して、高齢者介護施設が増えればいいが、そこで働く人も不足しているので、施設だけを増やすわけにもいかない現状が見えてきた。

そこで、私はあることを考えた。働きたいのに働けない、働けるのに働けない障害者の新しい仕事の間として、高齢者介護施設を導入してはどうかということだ。つまり、『福祉の充実』である。そして、今まで入所できていなかった高齢者が少しでも入所できるようになれば、家で介護していた人は働きに出ることができ、結果社会全体での労働者が増えるため、日本経済は活性化すると考えたのである。

現在、日本の高齢者介護施設が不足していることは、誰もが気づいていることであろう。その大きな原因の一つは、そこで働く人の不足である。数少ない人材での仕事は仕事内容もハードになり、人件費は高くなる。その結果介護施設の利用料が高くなり、今や高齢者介護施設は『お金持ちの人しか入れない施設』と言っても過言ではない。このままでいいのだろうか。厚生労働省の調査によると、日本の認知症の患者数は2005年の段階で190万人、2025年には300万人に達すると予測されている。²⁾ その多くは、高齢者だろう。もしこの予測通りになれば、高齢者介護施設の需要はさらに増えると予測される。高齢者介護施設の慢性的な不足が続けば、それだけ入所できない人も増える。それはつまり、家で介護する人が増えるということだ。家での介護者の増加は、社会での労働力を減少させることにつながる。

確かに数年前と比べ、高齢者介護施設の数が増えつつあるが、まだまだ需要





に間に合っていない。最近では、人手不足をまかなうため介護ロボットも導入され始めている。しかし、その数は足りず、何よりロボットは人間と違いぬくもりがない。ロボットの導入は確かに素晴らしいことだ。しかし、機械だけではなく人とのふれあいの中で、大切な人を介護してもらいたい、自分は介護されたいと思うのは私だけではないだろう。事実、直接ふれあうことで、今まで表情を見せなかった認知症の人が表情を見せるようになった、人に食べさせてもらっていた食事を自分でできるようになった、夜眠れなかった人がぐっすり眠れるようになったという例がある。³⁾ 人との直接的なふれあいは生きていく上で重要なのだ。

では、人手不足の問題をどう解決するか。そこで私は、新たな働き口を求める障害者に目をつけたのである。『特例子会社』という言葉聞いたことがあるだろうか。それは、障害者が働く場として、一般企業よりも易しく、作業所よりも難易度の高い、その二つの中間に位置する会社のことである。そこは作業所よりも賃金が高く、そこで働きたいと思う障害者は多い。その特例子会社の一つに、高齢者介護施設を入れてはどうかと考えたのである。学校での作業実習に、介護施設で働くことを目的とした実習を取り入れることで、障害者の介護施設への就職は可能だろう。決して、^{ゼロ}0から百まですべての仕事を押しつけるのではない。特別な資格のいらない簡単な仕事など、それぞれができることをしてお金を稼ぐ。そしてそれは、働く障害者にとって人生の生きがい・やりがいとなるだろう。そこで障害者が働くことで、高齢者介護施設に入所している人は、より多くの人の優しさに触れることができるのではないかと考える。

以前、認知症に関する講演会の資料を目にした時「私は、親の介護のために仕事を断念した。後悔はしていないが、やっぱり将来が不安だ。」「介護者が一日に介護に要した時間を労働に換算すると、デイサービスなどの日帰りの施設サービスを使わない場合、平均で1万5,250円になる。」⁴⁾ という記事を見つけた。まだまだ現役で働いてほしいと思われる人や十分働ける人たちが介護のために仕事を辞める。それは企業などにとって労働力の減少となり、日本経済において大きな損失となるのではないか。少子化で労働力の不足が叫ばれる今、これは避けたい問題だ。福祉、特に高齢者介護の面での福祉の充実は、このような人々が働ける社会を作り、日本経済を活性化することができるかと私は考える。確かに実際に実現するとすると、金銭面など多くの問題





があり、厳しい面もあると思う。しかし、福祉の充実は、弟のような障害者にとっては生きがい・やりがいを発見し、自分に自信をつけられる場の提供、祖母のような高齢者介護施設の利用者にとっては人とのふれあいの中で幸せを感じて生活できる場の提供、そして介護のために仕事を離れざるを得なかった人には、仕事に専念することを可能にするという多くのメリットを持つ。このメリットが経済に生み出す利益は、初めの金銭面での問題をも解決してくれるかもしれない。このことから、これからの日本経済の根本にあるべきものは『福祉』だと考える。

「いつまでも『自分らしく』笑っていたい」。⁵⁾ これは、私が以前読んだ本の見出しに書いてあった一言である。『福祉』が日本、そして世界の人々の自分らしさのために重要視された時、日本、そして世界の経済はよりよくなると私は信じている。『日本の目指す経済社会』それは、『福祉が最後まで誰もが自分らしく生きることを可能にする社会』ではないだろうか。

(注)

- 1) 3) 5) グスタフ・ストランデル『私たちの認知症 自分らしく生きるための「ケア・ツリー」とは?』
幻冬舎メディアコンサルティング、2009年
- 2) 荒井啓行監修『知っておきたい認知症と漢方の知識』ジーエー企画、2007年
- 4) 安田朝子「認知症の経済被害、損失とその支援を考える」『アルツハイマー病研究会 第11回学術シンポジウム速報集』、2010年

